

王であるキリスト

ルカ 23・35-43

2013.11.24 9:30 ミサ

オリビエ・シェガレ

(パリミッション会司祭)

王であるキリストの祝日は1925年に、近代化の諸悪、特に世俗主義と無神論主義に対するキリストの勝利を称賛するという意味を込められて設立されたそうだ。しかし、世俗社会と無神論主義を裁くよりも、対話していこうと訴えた第二バチカン公会議の後にこのような以前の考え方は受け入れがたいと思います。しかも福音書が描いている王であるキリストは、勝利どころか、皆から嘲(あざけ)られ、見棄てられ、無力の王の姿を表している。一人の犯罪者は「お前はメッシャではないか。自分自身と我々を救ってみろ」と。しかしイエスは権力を奮って、悪人をやっつける道を拒んでいる。

二人の犯罪者に囲まれているこうした無力のイエスを考えるたびに、私は韓国のカトリックの詩人、金芝河が1971年に書いた戯曲「金冠のキリスト」を思い出します。金芝河という詩人は最も尊敬されている韓国人の詩人の一人で、40年頃前の韓国の独裁政権下で抑圧された人々の側に立ってきた詩人です。民青学連事件に関わった者として逮捕され、死刑判決を受けたが、後で無実が認められ、今年の1月やっと無罪の判決を言い渡された。「金冠のキリスト」の筋立てですが、皆さんが知っているかもしれない。ある会社の社長はたくさんの寄付を集め、町の中央広場の真ん中に黄金の冠をかぶったコンクリートの王たるイエス像を建てる。仲間の金持ちや町の高官が毎日のように像の前に跪き祈ります。「イエス様よ、あなたは王の王です。教会の為に多くの寄付をしますからどうか私たちを犯罪者や敵から守り、私たちの商売が益々繁栄しますように」と。ところが夜になると、イエス像のもとに、寒さに震えながら、娼婦、乞食とハンセン病者が三人、肩を寄せ合いながら座り、互いに励まし合っている。こうしているうちに突然イエス像の口から嘆きが出てくる。「どうか私を捕虜の身から自由にして、解き放して下さい」。びっくりした3人が「どうやってあなたを自由にすることができるか」と聞く。イエス像のイエスが答える「お前たちの貧しさと柔和さ、あなたたちの温かい心、不正への怒りは私を自由にできます。あなたたちの手によってわたしが解放され、あなたと共に歩み、苦

しみ、共に立ち上がっていきたい」と。こうしたイエスの呼びかけに答えて、三人と後で登場するシスターたちや町の貧しい人は、いよいよコンクリートを打ち壊そうとするが、広場に現れた金持ちや機動隊がやって来て、彼らが捕まってしまう、という話だ。

この金芝河の戯曲は、喩え話で、当時韓国の独裁政権と癒着関係があった一部の教会は、人の苦しみに目を向けず、動いていず、権力の側に立っていた。この教会にイエスがとらわれの状態にあり、コンクリートで体をかためられ、金の冠をかぶせられ、何もできず、何も言えない状態になったということです。しかし貧しい民衆は、神様のことを知らなくても、とらわれのキリストを「解放」できると。そしてこれは決して韓国の教会のことだけではなく、教会は身内に固められ、政財界の側に立ち、あるいは制度化によって真の福音のメッセージを閉じ込めてしまう時に、逆にキリスト教を知らなくても、愛と義に飢え渴きをもって闘っている人々によってこの福音が生かされうるということ。

金芝河のこうした喩えのメッセージを受けて、私たちは自分の心の中でどういうキリスト像を建てているかと反省させられる。都合のいいように私たちは王たるキリストの勝利の意味を誤解して、影響力のある教会、悪に打ち勝ち、悪人を罰する教会の勝利とか、時々求めているかもしれません。過去の歴史を振り返ると残念ながら、教会は社会に奉仕するどころか、社会の上に立って、正しさを訴え、自分の利益を求めた時代がありました。バチカン第二公会議、そして今のフランシスコ教皇は、教会は福音の原点に立ち返り、貧しくて、人類社会に奉仕するよう呼びかけています。今日の福音に描き出されているイエスの像は裸で、謙遜で、犯罪者に深い憐れみを持って、貴方は今日私と一緒に天国にいるのだと犯罪者に言い、命を捧げている。このイエスは人を裁かず、迫害者に対して、破門ではなくゆるしの言葉を述べ、回心へ招いて下さる。金芝河の戯曲の訴えるようにこのイエスをコンクリートのような堅い組織や制度に閉じ込めてはいけない。神の義と愛によって死から解放されたイエスに扉を開けて、受け入れたら、キリストは人々の中に入り、共に歩み、皆の命、皆の希望となってくれる。この信仰を持って福音宣教ができれば幸いです。